200901003A (DVDあり)

厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業

保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究

平成２１年度総括研究報告書

主任研究者　秋田　喜代美

平成２２（２０１０）年　３月

目次

Ⅰ．総括研究報告
保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究 ---------- 1
秋田喜代美

Ⅱ．分担研究報告
1．日本版 SICS（幼児版）の国際的評定者間一致率の検討 ---------- 6
秋田喜代美
2．日本版 SICS の幼児版利用と 3 歳未満児版作成 ---------- 8
芦田宏
（資料）保育者の評定
3．「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の汎用性と継続性を探る---------- １３
－保育者 A の自己評価記録から－
門田理世
4．「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を用いた保育者研修 ---------- １７
箕輪潤子
5．保育者養成大学の学生に対する「子どもの経験から振り返る保育プロセス」--- ２２
を用いた指導に関する検討
野口隆子
（資料１）クリップ１についての話し合い（抜粋）
（資料２）感想
6．日本における保育の質と自己評価に関する研究 ---------- ３０
鈴木正敏
7．幼稚園教育要領と教育課程の評価方法の開発 ---------- ３３
小田豊
（資料）幼稚園教育課程状況調査

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表 ---------- ５４

Ⅳ．研究成果の刊行物・別刷 ---------- ５５

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）
総括研究報告書

保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究

研究代表者　秋田　喜代美　東京大学大学院教育学研究科教授

研究要旨　本研究プロジェクトは、第１に保育の質に関する国際的政策や学術研究動向を調査すること、そして第２にその動向をふまえて、日本の園文化に応じた形で今後長期的に使用できる保育環境の質尺度（幼児版、乳児版）を開発すること、第３にそれを保育研修に利用することでその方法の有効性や活用法を開発検討することである。最終年度である本年度は、第１には昨年度作成した日本版 SICS 幼児版をさまざまな園で実際に利用することやベルギーでも同一ＤＶＤに評定してもらうことで本幼児版の信頼性、妥当性、使用のあり方の可能性や効果を検討した。また第２には、同様の理念での乳児版ＳＩＣＳのＤＶＤを実際に開発作成した。また第３には、これらの開発と研修利用をふまえ、保育所での自己評価のあり方との関連、さまざまな自己評価の指標が国内外でこれまでに開発されてきているが、それらの指標や方法との関係を比較検討する中で、本尺度の特徴と保育所での自己評価の関係やあり方を検討議論した。

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

秋田喜代美・東京大学大学院教育学研究科教授
小田豊・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所理事長
芦田宏・兵庫県立大学環境人間学部教授
鈴木正敏・兵庫教育大学学校教育研究科准教授
門田理世・西南学院大学人間科学部准教授
野口隆子・十文字学園女子大学人間生活学部専任講師
箕輪潤子・川村学園女子大学教育学部講師
以上７名

研究協力者
淀川裕美・東京大学大学院教育学研究科修士課程院生

A.　研究目的

本研究プロジェクトの目的は大きく、３点に整理することができる。第１に、保育の質、特に保育過程の質という実践の側面に関する国際的政策や学術研究動向を調査すること、第２にその調査研究動向をふまえて、日本の保育所の園文化に応じた形で今後長期的に使用できる保育環境の質尺度（幼児版、乳児版）を開発すること、さらに第３に、その開発した尺度を保育所での園内研修や自己評価等の場での保育研修に利用することで、方法の有効性や活用法を開発検討することにある。

B.研究方法

１）幼児版の妥当性・信頼性の検討
２）乳児版の作成
３）幼児版の保育所での園内研修ならびに養成校での活用
４）日本における自己評価のあり方と保育の質、および本開発尺度の関連性と特徴に関しての検討

（倫理面への配慮）

１　本尺度の開発にあたっては、オリジナル尺度の開発者であるベルギー　Leuven 大学　Ferre Laevers 教授から学術研究において本尺度をもとに日本版を作成し、日本国で使用することについて承諾を得、またベルギーでその尺度を普及している Kind end Desin にも了解を得て実施している。また日本側で修正した点を説明をしその点に関する了解も得た上で出版をしている。

２　研修用 DVD 作成のためのビデオクリップ撮影に際しては、乳児版に関しても子

どもならびに保育者の撮影に関して、学術研究上の使用であることを園として承諾を得た上で実施した。また開発した内容に関しても、担当園に事前に報告し、研究発表等での公開の承認を承諾書によって得ている。

３　一般向けに幼児版を冊子として作成公刊する際には、DVD 撮影園、表紙等の写真掲載を園ならびに保護者に承諾を得た上で発刊し、その旨出版物にも記載した。

C. 研究結果

本報告書第２部の各研究分担者からの報告部分に、内容の詳細が記されている。大きくは以下の点を、研究結果として得ることが出来た。

１　日本版 SICS（幼児版）の妥当性と園内での研修および保育士養成教育での利用

１）第２部１章（秋田報告）では、ベルギーで開発された SICS を日本版として作成した DVD が、ベルギーのオリジナル SICS 作成者からみて実際にどの程度の評定の信頼性、内容の妥当性をもっているかを明らかにした。ベルギーにおいて日本版へ評定を実施してもらい、比較検討を行なった結果、80%（21 シーン中 17 シーンでの一致）の一致率が評定者間の一致率として文化を越えて見出された。この結果からは、日本版ＳＩＣＳがオリジナルＳＩＣＳの意図を十分に汲み、日本の保育にあわせて作成されたものであることを示すものであることが明らかとなった。

２）第２部２章（芦田報告）では、保育士たちの自主勉強会おける実施結果を報告した。まず初回において「子どもたちのエピソードから始める自己評価法」について説明を行い、質疑を受けた後、個人参加の勉強会であるため、園内研修という形で行うことには無理があるかもしれないが、同じ園の者同士で行ってみることが話し合われた。そして、2 回目と 3 回目の自主勉強会では参加者がそれぞれの園で行った取り組みについて発表を行なった。その結果、理解の深化は図ったが、Form A から Form D までの使い方が十分に浸透できず、取り組みあたっては、スーパーバイザーの必要性が指摘された。しかし一方で保育士間での熱心な話し合いを行うなど、この自己評価法の特徴である、同僚との話し合いという点については十分に実践されており、取り組もうとする熱意とそれに応じる同僚のいる園では、園内研修という形態を取らなくても、実施できることが明らかとなった。また、取り組みあたって、幼児、乳児という区別なく子どもの実態を見取ることでこの自己評価法が利用可能であるということが実践者自身の経験をもとに明らかになった。

３）第２部３章（門田報告）では、園内研修として「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版SICS）」をすでに一度実施したことのある私立保育所において、保育者Aが自主的に自己評価として「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版SICS）」を用いた記録から、「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版SICS）」の汎用性と継続可能性を検討した。その結果、保育者一人では分析と言えるほどの多くの視点が出せないことを明らかにしている。自分自身で自分の保育のよさを見出し認める作業は難しく、保育者個人が行う自己評価ではなく、園内研修を通しての実施の方がさまざまな分析視点、保育のよさへの視点が得られやすいことが示された。また同時に、個人研修という意味合いでは、一人で気兼ねなく自分の都合のよい時間帯に自由に使え、ある一定の観点を持って保育を振り返ることは個人レベルでも有意味である点を保育者自身が指摘していた。ここからは、今後、自己内対話を充実させていく視点を検討し、盛り込んでいくことで、園内研修及び保育者個人が行う自己研修としての自己評価法の在り方を充実させていくことができることが明らかにされた。

４）第２部４章（箕輪報告）では、１保育所で「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を園の特徴や実態に応じて以下の４点の工夫をし、実施していたことを示している。

第１に「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の理念や考え方を理解することに重点を置き、すぐに全体の園内研修で利用するのではなく、園長から主任、主任からクラスチーフ、クラスチーフからクラス担任へと段階を追って SICS の理念や考え方を伝えていく工夫を見出していた。ツールとして利用するという形ではなく、理念や考え方を理解することに時間とプロセスをかけることで、理念や考えが丁寧に理解されるだけでなく、保育者たちが自主的に取り組もうとするようになっていくことを示唆している。また第２に FormA のエピソード記録と合わせて、DVD の映像を用いることによって、記録のエピソードについてより具体的なイメージを共有することができた点である。DVD 使用によってその場にいるような気持ちになりながら客観的に見ることができることが示された。また第３に、参加者によって、研修の進め方を変え、１回目は園長・主任とクラスチーフの少人数だったため、全員で机を囲むという形式を取っていたが、２回目は違うクラスの保育者と一緒になるような小グループでの話し合いをした上で発表するという形式をとっていた点である。第４に、司会の先生や園長が評定についての考え方を、研修中何度も補足として繰り返していた点である。

以上から保育所の実態や必要に応じて工夫をしながら研修を行うことが、本方法では可能であることが明らかになった。「子どもの経験から振り返る保育プロセス」は実施方法を工夫することができるため、園の実態や特徴にあわせた園内研修をすることができることが見出された。

５）第２部５章（野口報告）では、４年制の保育者養成大学の学生に対し、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の尺度を利用した指導を実施し、学生の子どもを捉える視点の変化と尺度の有効性や利用可能性について、記録をもとに検討を行なっている。その結果、尺度を用いた他者との話し合いの過程を経験することで、視点の違いや話し合いへの興味関心が示されることを明らかにしている。新たな子ども理解や自分の視点の振り返り、視点の相対化、話し合いの重要性に関する指摘があり、多くの学生において有効性が示唆されている。ただしそのためには、話し合いやグループ活動をある程度経験し、慣れている必要があることが指摘されている。自分の見方に自信がない場合やグループでの活動に苦手意識をもっている場合には、自分では考えずなるべく人にあわせようという意識が働く可能性もあり、学生のそれまでの学習経験や個人差に配慮した指導のあり方も示された。

２　乳児版 SICS の開発

第２部２章（芦田報告）で報告されているように、以下の手順で本乳児版は開発された。幼児版との大きな相違点は。「夢中度」ではなく、「安心度」に焦点を当てた DVD クリップを作成した点である。

１）まず３歳未満児を対象として１保育所に協力を頂きビデオ撮影を行い、 70 シーンをビデオクリップとして編集し、研究メンバーで検討した。その結果として、その中から 39 のビデオクリップを選択した。

２）それをある公立保育所の保育士で、3 歳未満児保育の経験のある 16 名に視聴してもらい、「安心度」「夢中度」の評定をお願いした。その結果を集計した結果、評定の一致度は「安心度」は 43.8%－100%、「夢中度」は 31.3%－93.8%であった。評定値の一致度が低いものがあるのは、今回評定して頂いた保育士の方々は、特にこの評定についてのトレーニングを受けた人たちではなく、日常の保育の中での経験に基づいて評定表の記述を参考に、前後の保育の流れが分からないビデオクリップであるがために、着目した点や、経験知の違いなどによって生じたものであると考えられる。

経験年数の違いを元に集計をいくつか行ってみたが、特に、一定の傾向がみられたものはなかった。そこで、各ビデオクリップの評定の決定は、一致度が60%を越えているものはそれを基準に行い、一致度が低いものは評定の分散を見ながら中間の値を取る形で行った。そして、今回の目的である「安心度」を中心としたDVDを作製するために、評定の分布を考慮し、20のクリップを選択した。

3）選択した20のビデオクリップの評定について、評定のポイントとなった点について、評定を行って頂いた方の中から保育経験が長く、乳児保育の経験も十分あり、園長経験も長い保育士２名と検討を行った。各評定の根拠となった視点、ポイントについて議論を行い、添付DVDの評定理由についてそれを生かした。

乳児版に関しては、今回の研究期間では尺度の開発までにとどまり、他園での研修利用の分析までは時間的に不可能であった。今後この点はさらに検討が必要である。

3　日本における保育の質の向上、自己評価動向と本尺度との関連

1）第２部６章（鈴木報告）では、日本の保育所における保育の質の向上に関して、保育所の自己評価との関連性を見いだすべく、分担研究者である兵庫県立大学・芦田宏と、目白大学・増田まゆみ氏、四天王寺大学・埋橋玲子氏を加えてシンポジウム形式で検討を行った。主に比較検討の対象としたものは、ベルギーのSICS（A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings)、アメリカのECERS/ITERS（保育環境評価スケール幼児版・乳児版)、ならびに厚生労働省から出された保育所における自己評価ガイドラインについて、それぞれの持つ特徴とその有用性について比較した結果、日本の保育の質の向上に対して、貢献しうる可能性を含んでいることが明らかとなった。

SICSについては、日本の保育文化に合うような形での応用が求められるものの、子どもの生活の瞬間瞬間を安心度と夢中度という軸でとらえるという考え方が、養護と教育という保育の側面を見ていくことにつながっていくと考えられる。また、保育環境スケールは、客観的なデータの蓄積が見込まれるということから、広く使われた場合に、政策決定への根拠となりうる可能性があることが示唆された。そして、厚生労働省の保育所の自己評価ガイドラインについては、その背景にある考え方として、保育士が主体的に喜びを感じながら保育にあたることができるような評価を目指していることが見出された。

2）第２部７章（小田報告）では、我が国の幼児期における教育の質を保つための標準的な保育・教育課程の基準を示すものとして、幼稚園教育要領・保育所保育指針を挙げることが出来るが、この基準となる保育・教育課程の質を評価することは、各園・所に任されているのが現状であった点をまず指摘している。そして文部科学省が開発を進めてきている教育課程の評価方法を紹介することを通して、本尺度との関連を検討した。この文部科学省による観察調査の方法は、数量的な処理を排除しながら保育の良さをあるがまま捉えようと子どもたちのエピソードから進められていることを明らかにし、本尺度だけでなく保育所保育指針の保育課程評価へも貢献できるものであることを指摘している。

D　考察

以上、本年度内に１　日本版SICS（幼児版）の妥当性と園内での研修および保育士養成教育での利用、２　乳児版SICSの開発、３　日本における保育の質の向上、自己評価動向と本尺度との関連の３観点から研究を行なった。それによって尺度の学術研究上の信頼性や妥当性とともに、園での実践における研修ならびに養成機関での使用の有用性は明らかにされた。ただしそれによって園の保育過程がどのように向上されたかと言う質の向上過程の実証

研究までには至っていない。今後開発した幼児版、乳児版について時間をかけて数園で実際に利用しての変化を分析したり、また他の尺度との並行利用によってこの尺度使用と他の尺度利用との関連を検討していくこと、またその中で見出された本尺度の課題の検討により改訂なども残された課題である。ただし、すでに数園では各園の実態を踏まえた工夫によってそれぞれ独自の利用の仕方をしてきており、統一的に特定の数量的な効果を指摘するのではなく、各園での創意工夫の事例を収集分析していくことも必要であると考えられる。

E. 結論

以上、最終年度である本年度においては「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の尺度の幼児版が実践的に使用可能である子とを示すと共に、乳児版について幼児版作成の経験を踏まえて開発を行なった。また他の現在の保育の質の尺度や動向との関連から、本尺度は園での実践向上の有用性を指摘した。と同時に、考察でも述べたように、本尺度活用の分析についてはさらに質向上との関連を丁寧に分析していくという課題も残されている。

F 健康基本状況

特に問題はない。

G 研究発表

1.論文発表

秋田喜代美「国際的に高まる保育の質への関心」『BERD』16,13-17.

秋田喜代美「保育者の資質を高める園内研修とは」p1-p5『これからの幼児教育を考える』2009年秋号　ベネッセ次世代育成研究所

2 学会発表.

Akita,K. 2009 Early Childhood Mathematics Teaching in Japan: Participation in Mathematical Activities in Everyday-life Settings 17.4.2009 Chicago, Erikson Institute of Education

鈴木正敏・増田まゆみ・埋橋玲子・芦田宏・小田豊　2009　「保育の質」と自己評価について考える（シンポジウム発表）　日本保育学会第62回大会発表論文集,p127

Akita,K 2009 *Improving the Quality of Early Childhood Education in Japan: National Educational Policy Reform and the Development of Process-Oriented Self-Evaluation Instrument' 19.10.2009 Shanghai International child development and education forum.*

3 著書

秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊『子どもの経験から振り返る保育プロセス：明日のより良い保育のために』（ＤＶＤ付）2010 pp43.幼児教育映像制作委員会

秋田喜代美（著）　2009『保育のこころもち』　ひかりのくに

秋田喜代美・野口隆子（編著）2009『新保育シリーズ　保育内容　言葉』光生館

秋田喜代美2009「専門性の向上を目指す園の自己評価」(財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構（編）『幼稚園における学校評価―こどもの育ちをみんなで支える園をめざして』10-12.

小田豊・神長美津子(編著) 2009『教育課程総論』北大路書房

現代保育研究所編　2009『やってみよう！私の保育の自己評価』フレーベル館（著者増田まゆみ・柴崎正行・西村重稀・石井哲夫・石井章仁・大嶋恭二・小沼肇・倉掛秀人・三溝千景・高辻千恵・守山均・矢藤誠慈郎・鈴木正敏）

小田豊・芦田宏（編著）2009　『新保育ライブラリ　保育内容　言葉』北大路書房

箕輪潤子　2009『若手保育者の指導力アップ4　遊びがもっと魅力的になる！３・４・５歳児の言葉がけ～砂場編』　明治図書

H 知的財産権の出願・登録状況

特に出願や登録はない。

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）
分担研究報告

日本版 SICS（幼児版）の国際的評定者間一致率の検討

代表研究者　秋田　喜代美　東京大学大学院教育学研究科

本研究は、ベルギーで開発された SICS を日本版として作成した DVD が、オリジナル SICS 作成者からみて実際にどの程度の評定の信頼性、内容の妥当性をもっているかを明らかにするために、ベルギーにおいて日本版へ評定を実施してもらい、比較検討を行なった。その結果、80%（21 シーン中 17 シーンでの一致）の一致率が評定者間の一致率として文化を越えて見出された。本結果は、日本版ＳＩＣＳがオリジナルＳＩＣＳの意図を十分に汲み、日本の保育にあわせて作成されたものであることが明らかとなった。

A．研究目的

筆者らが開発した日本版 SICS はベルギーで開発された SICS の理念や方法に学びながらも、実際の日本の保育場面において DVD を作成し、また評定の方法等も本研究プロジェクトメンバーにおいて一致率が高かったＤＶＤを選択し、その解説内容も全員で吟味をした上で作成を行なったものであった。この意味で日本内での一致率、ツールの信頼性は保障されていると考えられる。しかし日本版が、オリジナルであるベルギー開発の SCIS の作成者たちから見た時に、方法や評定の視座において、オリジナルと同じ視座をもっているのかと言う評定に対する妥当性、信頼性を明らかにすることは、一定の自己評価方法のツールの開発として、ツールの信頼性を考える上で重要であると考えられる。また差異が生じた場合にはその背景に保育への文化的見方による相違があるのではないかと考えた。そこでこの妥当性の検討を目的とした。

B．研究方法

オリジナル SICS の作成や開発を手がけた Ferre Laevers 教授ならびにその研究所職員に日本版のＤＶＤならびにその評定の規準となった解説（日本語を英語に訳した内容を添付）を送付し、実際にベルギーでの方での評定を送付してもらい、その理由の比較から検討を行なった。

C　研究結果

評定結果の異同は表１のようであった。

表１　日本ビデオへのベルギー・日本評定の一致・不一致数

両者評定	対象クリップ数
同一評定	１１
0.5 点の相違	6
１.０点の相違	3
1.5 点の相違	1
全体	２１

本結果からは２１のクリップのうち２０クリップが１点までのずれであり、この評定からは、国や文化をこえて、子どもの夢中・没頭をとらえる視座にはきわめて高い共通

性がみられることが明らかとなった。これらの評定において、ずれの箇所のいていずれかの国がつねに高い評定をしているということではなく、日本の方が評定が高いクリップ、ベルギーの方が評定が高いクリップの両者が存在していた。したがって両者はそれぞれの判断根拠によって正確に評定を行なっていてどちらかが甘い評定をしている傾向をさしているのではないことがわかる。

そこで評定が同一でなく、0.5点から1.5点までのずれが生じた原因を両者のビデオ評定理由をつきあわせることでみられた原因として３点をあげることができる。

第１には、対象児が行動せずあるものを見ているという状況をどのように評定するのかと言うことの差である。みるということがきわめて能動的な行為であるとの認識からベルギーの方がこの理由での評定が高い。これに対して日本の方が見ることの能動性は認めているが、文脈と子どもの行動から評価をしているという相違がみられた。見ること、観察することの価値をどのようにみるのかは今後さらに議論の必要性があると、両国の研究者で議論になった点である。

また第２には、非言語的なサイン、表情の読み取りである。退屈な表情やまなざしなどから感情の表出をいかによみとるかには文化的サインが影響している。

そして３点目には、２点目とも関連はしているが、ビデオクリップは時間的な流れの幅をもっている。したがってそのクリップ内でどこを特に重点として評定しているのかによって、評定に変化がみられる。これは文化的差異というよりも、このビデオクリップで捉える方法論的難しさであるともいえる。

しかしながら、その中で比較的高い一致率を得たことから、本ＤＶＤが当初の理念と合致したものであることが示された。提唱者のラーバー教授によれば、他の国でもその国固有のＤＶＤが作られているが、その時の方が一致率が低く、今回のＤＶＤが一致率が高かったのは、一つには撮影されたＤＶＤがポイントが明確で焦点が絞られている映像であったためではないかということであり、また２点目には数多くのクリップの中での映像選択が明確であったためではないかとの指摘があった。

本ＳＩＣＳの研究については、台湾とも共同研究を行なっているので、今後台湾の共同研究者にも日本版の評定をしてもらうことによって、さらにこの評定の比較検討をしてみることで、自文化で自明となっている行為の固有性を意識化できるのではないかと判断できる。

本ＤＶＤは導入のためのものであり、各園が自園でエピソードをえらんだり、撮影し記録することがこの方法ではもっとも大事になるが、その時のカメラワークのこつやアングル、場面選択の方法の重要性を伝えることも、今回評定をしてもらったことで明らかになった点ということができよう。マニュアル等をさらに改善する際に本考察を生かしていきたいと考える。

厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)
分担研究報告

日本版SICSの幼児版利用と3歳未満児版作成

分担研究者　芦田　宏(兵庫県立大学)

本研究は、Leuven 大学(ベルギー)の Ferre Laevers 博士たちが開発し、実施している保育の質向上のためのツールである SICS(A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings)を参考に作成した幼児版日本版を用いて、実効性を検証するとともに、3 歳未満児版を作成することにある。昨年度の研究によって作成した幼児版を用いた研修会を開催し、参加園での利用を呼びかけ、その結果を議論する中で、3 歳未満児版についても園内研修については同じ方法で行えると思われた。したがって、幼児版では「夢中度」を中心とした評定用 DVD を作製したが、本年度は 3 歳未満児版において、「安心度」を中心として研修用 DVD を作製した。

A. 研究目的

Leuven 大学(ベルギー)の Ferre Laevers 博士たちが開発し、多くの国で使用されている保育の質の向上ための自己評価法 SICS(A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings)を参考に作成した日本版(幼児版)の検証を通して、3 歳未満児版の作成を行うことである。

B. 研究方法

1. 日本版 SICS(子どもたちのエピソードから始める自己評価法)を保育者を対象とした研修会において紹介する。
2. 参加者の自主的取り組みの報告会において、実施可能性について検討を行う。
3. 同方法の 3 歳未満児を対象とした場合の可能性を検討する。
4. 3 歳未満児を対象としたビデオクリップの撮影と「安心度」を中心とした編集による DVD の作製。
5. ビデオクリップの「安心度」の評定の決定。

C. 研究結果

1. 兵庫県 H 市における保育士自主勉強会において「子どもたちのエピソードから始める自己評価法」について説明を行い、質疑を受ける。大変強く興味を持ったメンバーもいたが、個人参加の勉強会であるため、園内研修という形で行うことには無理があるかもしれないが、同じ園の者同士で行ってみることとなった。

2. 2 回目と 3 回目の自主勉強会で参加者がそれぞれの園で行った取り組みについて発表。各取り組みにコメントしながら理解の深化を図ったが、Form A から Form D までの使い方が十分に浸透できず、取り組みあたっては、スーパーバイザーの必要性を感じた。しかし、一方で保育士間での熱心な話し合いを行うなど、この自己評価法の特徴である、同僚との話し合いという点については十分に実践されており、取り組もうとする熱意とそれに応じる同僚のいる園では、園内研修という形を取らなくても、実施できることを見いだせた。また、取り組みあたって、幼児、乳児という区別なく子どもの実態を見取ることでこの自己評価法が利用可能であるという感触を得た。

3. 3 歳未満児を対象としたビデオ撮影を行った。70シーンをビデオクリップとして編集し、研究メンバーで検討した。結果としてその中から 39 のビデオクリップを選択した。これを兵庫県 H 市の公立保育所の保育士で、3 歳未満児保育の経験のある 16 名に視聴してもらい、「安

心度」「夢中度」の評定をお願いした。

4. 上記の結果を集計した結果、評定の一致度は「安心度」は 43.8%－100%、「夢中度」は 31.3%－93.8%であった。評定値の一致度が低いものがあるが、これは、今回評定して頂いた保育士の方々は、特にこの評定についてのトレーニングを受けた人たちではなく、日常の保育の中での経験に基づいて評定表の記述を参考に、前後の保育の流れが分からないビデオクリップであるがために、着目した点や、経験知の違いなどによって生じたものであると考えられる。経験年数の違いを元に集計をいくつか行ってみたが、特に、一定の傾向がみられたものはなかった。各ビデオクリップの評定の決定は、一致度が 60%を越えているものはそれを基準に行い、一致度が低いものは評定の分散を見ながら中間を取る形で行った。そして、今回の目的である「安心度」を中心とした DVD を作製するために評定の分布を考慮し、20 のクリップを選択した。

5. 選択した 20 のビデオクリップの評定について、評定のポイントとなった点について、評定を行って頂いた方の中から保育経験が長く、乳児保育の経験も十分あり、園長経験も長い 2 名の方と検討を行った。各評定の根拠となった視点、ポイントについて議論を行い、添付 DVD の評定理由について貴重な意見を得ることができた。

D. 結論

兵庫県 H 市の保育士の方々の協力によって、昨年度作成した日本版 SICS は、正確に実施するにはスーパーバイザーが必要ではあるが、熱意があり、やろうとする同僚がいれば、誰でも経験年数に関わりなく、取り組めるものであることが見いだせた。また、乳児を対象としても同じように行うことができる可能性を感じさせた。

そこで、3 歳未満児を対象とし、「安心度」を中心として評定するための参考となる DVD の作製の必要性を強く感じ、「社会福祉法人　あけぼの事業福祉会　あけぼのドロップス」の協力により、素材となるビデオ撮影を行うことができた。そして、それを元に H 市の保育士の方々の協力によって、「安心度」を中心とした評定トレーニングのための DVD を作製することができた。作製した DVD は本報告書に添付している。また、その各ビデオクリップの評定については「資料」としてこの報告の後に掲載している。昨年度作製した「夢中度」を中心とした DVD とあわせて、各園での自己評価のための参考となり、保育の質の向上に寄与することを期待している。

謝 辞

今回の研究にあたり、多くの方々の協力をいただきました。兵庫県 H 市の保育士の方々、子どもたちの様子のビデオ撮影に協力頂いた「社会福祉法人　あけぼの事業福祉会　あけぼのドロップス」の子どもたち、保護者の皆様、そして保育士の方々、末尾になりましたが、感謝申し上げます。ありがとうございました。

＜資料＞

シーン１

・　自分の体を使って機嫌良く遊んでいるが、大きな歓喜の声を出しているほどでもなく、はつらつとして喜びにあふれているとまでは言えない。	【安心度　４】
・　機嫌良く遊んでいるが、声がする方に振り向いたり、保育者が通ると目で追ったりして、遊びに完全に没頭しているという状態ではない。	【夢中度　４】

シーン２

・　寝起きのような状態。強い不安感は示しておらず、泣いてはいないが、何かの関わりがあると泣いてしまいそうな状態。	【安心度　２】
・　友だちを見ているが興味を持って見ているようではない。今自分が何をしたいのかも発揮していない様子。	【夢中度　１】

シーン３

・　興味のあるものは目で追っているが、簡単に気が散ってしまっている。快適か快適でないかの明確な様子も見られない。	【安心度　３】
・　何も活動をしていないわけではなく、興味のあるものは目で追っているが、それに触発されて体を動かすなどの行動もなく、ぼーと見ている。	【夢中度　２】

シーン４

・　両手でかごを振って音を出したり、全身を使って遊びを楽しんだりしている。動きが生き生きとしていて、満足している。	【安心度　５】
・　全身を使って遊びを楽しんでいるが、かごが手から離れても特にこだわった様子はない。しかし、体全体を使っての遊びは継続している。	【夢中度　４＋】

シーン５

・　他の子の泣き声やビデオカメラに気が散っているときもあるが、活動を継続しようとしている。積み木がうまく積めても、失敗しても大きな表情や態度の変化は見られないが、工夫して積もうとしている態度が伺える。	【安心度　３＋】
・　しかし、立ち上がって、積んだり、落ちた積み木を拾いに行ったりなどの行動は見られず、活動へのモチベーションが高いようには見えない。	【夢中度　３】

シーン６

・　表情が豊かで、機嫌が良く、満足して遊んでいる様子がうかがえる。	【安心度　５】
・　近くに他の子がいてもまったく気にせず、遊びに没頭している	【夢中度　５】

シーン７

・　自分の好きな場所を見つけて、寝転がった。しかし、不快感は示さないものの、満足しているという表情もない。	【安心度　３】
・　寝転がっているだけで、活動らしい活動をしていない。ぼーとしているわけではないが、自分の好きな場所に居続けているだけで、自分の能力を発揮するような活動はしていない。	【夢中度　３】

シーン８

・　楽しみながら電車を動かしている。チェーンを積んで運ぼうとしている工夫も見られる。しかし、同じ場所で遊んでいる子のすることが少し気になっているようで安心しきっているとは言えない。	【安心度　４】
・　同じ場所にいる子のすることが気になっているせいか、活動へのモチベーションも高いが、集中しきれていないように見える。	【夢中度　４】

シーン９

・ 電車の模型を持って座っている。「ガタンゴトン」と口には出しているが、意欲的に電車を動かそうともしていない。不快を示してもいないが、快適に遊んでいるとも見えない。	【安心度　３】
・ また、電車の模型を観察しているように見える場面もあるが、漠然と見ているだけで細かい観察をしているようにも見えない。しかし、まったく活動していないわけでもなく、模型との関わりの姿は見える。	【夢中度　２＋】

シーン１０

・ アヒルのおもちゃを引っ張って遊んでいる。満足して楽しんでいるが、ビデオカメラを見ると、緊張の様子が見える。	【安心度　４】
・ 引っ張っているアヒルが引っかかると強く引っ張ったり、ひっくり返ると直したりするなどアヒルのおもちゃを引っ張る遊びに強い関心を持ち、行っているが、ビデオカメラが気になっている様子も見られ、集中が途切れている。	【夢中度　４】

シーン１１

・ 赤いエプロンをした子に絵本を取られそうになり、泣きながら取られまいとしている。そのまま、気持ちが立ち直っていない。	【安心度　１】
・ 絵本を取られそうになり、逃げながらも絵本を開いて見ようとしている。そこへ絵本を取ろうとした子が近寄ってきて、また逃げ出した。絵本を読もうとする意欲に強いものがあるが、じゃまされている。	【夢中度　２＋】

シーン１２

・ 淡々と、積み木を取りだして遊んでいる。表情の変化はなく、快適な快適でないかの様子も明確ではないが、休むことなく手が動いている。	【安心度　３＋】
・ 友だちやビデオカメラをちらちらと見るが、それで気が散ってしまうのではなく、継続的に積み木で遊んでいる。一箇所に積み上げるなどの目的性は明確ではないが、手に散った積み木の形に合わせて活動を変えている。	【夢中度　４】

シーン１３

・ 絵本を取りだして遊んでいるが、表情に変化はない。視線は周りへ向いていて、絵本を読むような仕草はない。しかし、絵本を片付けるところまで行っているところから、機嫌が悪いわけでもないことが分かる。	【安心度　３】
・ 絵本を取りだして開いたりしているが、絵本を読むわけではなく、視線も他の方を見ている。特に目的があって絵本を取りだしたようでもなく、すぐにしまい込んでしまった。	【夢中度　２】

シーン１４

・ 眠そうにしているが、ぐずることなく、人の動きを目で追ったり、手元のおもちゃに手を伸ばしたりしている。機嫌は良いように見える。	【安心度　４】
・ 手元のおもちゃに手を伸ばすが、思うように操作できるものではないため、持続しない。しかし、人の動きを追う目はしっかりしており、何かをしたそうにはしている。	【夢中度　２＋】

シーン１５

・ おもちゃのところで遊んでいたが、保育士が他の子と遊んでいる声が聞こえると泣き出してしまった。途中、ボールを見つけ触ると泣き止むが、再び泣き出す。眠いのか、お腹がすいたのか、保育士を呼んでいる泣き方のように見える。	【安心度　１】
・ 泣いているので、まったく活動はしていない。	【夢中度　１】

シーン１６

・　小さいぬいぐるみのしっぽをくわえて、吸っている。何も出てこないが、それに不満の様子もなく、くり返している。表情に変化もない。	【安心度　３】
・　絶えずくわえており、忙しくしているが、活動としてみると能力の発揮とも言えず、想像力を刺激しているとも言えない活動である。	【夢中度　３】

シーン１７

・　小さなぬいぐるみを持ち、鼻歌を歌うように声を出したり、しゃべったりして機嫌良く遊んでいる。	【安心度　５】
・　活動としては、ぬいぐるみを手にして楽しく遊んでいるが、特に何かに焦点を定めて遊んでいるわけではない。	【夢中度　４】

シーン１８

・　楽しく遊んでいるところへ、じゃまが入って、少し不安な気持ちを抱いたように見える。しかし、それほど強い不安感ではなく、遊びに再び入っていける程度のもので、機嫌もそれほど悪くなっていない。	【安心度　３】
・　じゃまが入って遊びを中断させられたが、再び遊び始めるなど、活動へのモチベーションは高い。	【夢中度　４】

シーン１９

・　ビデオカメラを見つめ、テレビ目線で楽しく満足して遊んでいる。ビデオカメラに向かって声を出しながら手を振るなど、表情も豊かである。	【安心度　５】
・　ビデオカメラを意識しているが、滑り終わったと、次の自分の順番を待っているなど、活動に強い意欲と魅力を感じているように見える。	【夢中度　５】

シーン２０

・　ままごと遊びを始めようかというところだが、となりの子がしているエプロンが欲しくなり、取ろうとしている。しかし、取れないので、強い不満感を示している。	【安心度　１】
・　エプロンを取ることに必死になっている。しかし、遊びとしては何の活動もしていないと言える。ぼーとしているわけではないが、決して自分の能力を十分に発揮している状態とも言えない。	【夢中度　２＋】

厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)
分担研究報告

「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の汎用性と継続性を探る
保育者Aの自己評価記録から

分担研究者　門田理世(西南学院大学)

本研究は、一度園内研修として「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を実施したことのある私立 C 保育所において保育者 A が自主的に自己評価として「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を用いた記録から、「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」の汎用性と継続可能性を検討した。その結果、個人向けの自己評価法としては、保育者個々が自己内対話を充実していけるような視点を検討し、盛り込んでいくことで保育者個人が行う自己研修を支援していける可能性、及び、園内研修を通して他の保育者と刺激し合って学び、保育者個々が保育実践に対する自己内対話を定着させていくことが自己評価を継続していく鍵になることが示唆された。

A. 研究目的

本研究は、一度園内研修として「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を実施したことのある私立 C 保育所において保育者 A が自主的に自己評価として「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を用いた記録から、「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」の汎用性と継続可能性を検討するものである。

B. 研究方法

対象:私立 C 保育所に勤務する保育者 A

期間:2009 年 7 月～8 月(保育者 A が「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を用いて自己評価を実施した期間)及び 2010 年 1 月(保育者 A がインタビューを受けた期間)

方法:保育者 A が個人の自己評価を行うために用いた「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を、どのように使用していたのかを記録とインタビューから検証し、「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版SICS)」の汎用性及び継続可能性についての考察を行う。

C. 研究結果

1. 保育者Aの「子どもの経験から振り返る保育プロセス」に対する経験と認識

保育者 A の勤務する私立 C 保育所では、過去に職員全員で「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を用いた園内研修を行ったことがある。保育歴 3 年目の保育者 A もその中の一人として参加しており、「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を何の目的でどのように用いるのか、その理念と方法に関しては一定の理解を示している。その後、園全体で再度「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を用いた園内研修を行うことはなかったが、保育者 A は自己の保育実践を見つめなおす手法として有用ではないかと考え、自分自身の自己評価として用いてみることにした(インタビューより)。

保育者 A は前回参加した折に、「子どもが活動の中でいかに安定して夢中になって自分の思いを遂げられているかは保育者として知っておく必要がある」と感じ、「記録して検証するプロセスは大変だったけれど色々な発見があって面白かったので、一人でもう一度やってみたらどうだろう」と単独での実施を試

行したとのことである。

2. 「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」の用い方とその理由

以下は、保育者 A が「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」をどのようなプロセスでどのように用いたのか、要点ごとに詳述する。

(1) ビデオ記録なし:今年度、初めて乳児クラスを離れて幼児クラスを担任することになった保育者 A は、「まだ入って間もないクラスの中で、自分自身の保育中にビデオを設置して撮影することは難しいと思った。他の保育者も忙しい中お願いするのは気が引けたし、自分の保育を自分のできる範囲内で振り返りたいと思っていた」という理由から、記録としてビデオ撮影を行うことは割愛された。

(2) Form A への取り組み:そこで、まず保育者 A は名簿順に男女それぞれ 2 名ずつ 4 名の子ども達を取り上げ、観察記録を取ることから始めた。いくつかのエピソードを保育中にメモ書きし、その中の一つを Form A に詳しく記載した。その記録を読み直し「夢中度」と「安心度」の評定を書き入れた。以下は、保育者 A の Form A に対する感想である。

(保育者 A)

日頃から観察をとることは園内研修でやっているので、それは難しいことではなかった。「子どもが夢中になって活動しているか」「安定して落ち着いて活動しているか」という観点を持って、子ども達の姿を数字で評価するという過程が、頭では理解できていても心情的に受け入れることに抵抗があった。しかし、子ども達の姿は私の子どもに対するかかわりの答えなのではないかと思うとこの数字は私の足りないところをわかりやすくするための方法だと捉えるようになり、抵抗感が少し薄らいだ。

(3) Form B 及び Form C への取り組み:「大雑把すぎてメモ程度の気付きしか書けなかった」と振り返る保育者 A にとって Form B を一人で書き上げることは困難であったのか、Form B は殆ど空白であった。保育者 A 自身、Form A で書き上げた観察記録を分析する観点を与えられたことは有用であると感じていても「集団でやったときとは違って、分析と言えるほどの多くの視点が出てこない」ことに戸惑っているようだった。むしろ、「Form C は自分一人でも細かい観点を見直せるのでためになるし使いやすかった」ようで該当しない項目を除いては、全てに印がつけてあった。興味深かったのは、保育者 A の Form C の位置づけである。保育者 A は、Form C をつけながら、Form C の Form A 及び Form B との関係性に混乱していたそうである。今回は、前回の園内研修とは違って他の職員と語り合う場面がなかったため、まず Form B でつまづいた。そのため、Form B を踏まえて行う Form C は、個人で行う際、何を対象として行うものなのかが分からなくなってしまったという。結局、自身のとった Form A のエピソードや評定を対象として Form C で挙げられている観点を見直そうとしたのだが、エピソードには出てこない観点に関してはどうするべきなのか。自身のクラス全体を対象として見直すべきなのか。観察記録のない状況で分析することは、根拠のない思い込みにはなってしまわないかという混乱を生じたとのことである。「エピソードとは関係ない日頃の保育のことが含まれてもいいのか」「クラス全体の記録がないのにクラス全体を見直してよいのだろうか」と困惑した姿が報告された。

(4) Form D への取り組み:Form D への取り組みに関して「自分自身の保育をほめることは難しい」というのが保育者 A の第一声であった。「子どもの姿が答えなのだとすると、そこからよいと思われる部分を書き出せばよいのだろうが、もっと自分の保育をよくしたいと思っているので、よくないところを見つめたい」という指向性を持つ保育者 A には、現段階でよいと思われる点に関しては書きにくかったようだが、改善したいところと明日から具体的に行うところの欄に関しては「大変ためになる」と受け止めていた。

3. 全体の流れを通して

一人でできる範囲で「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版SICS)」を用い、一人で保育を振り返る作業を試みて保育者 A は、「皆で話し合わないので一人だと保育の見方が甘くなるかも」「確認する作業が一人よがりになっていないか不安」「この自己評価全てを一人でこなしてすることは難しい」「使いやすい部分だけを使うのでは意味がないのでは」と感想を漏らした。一方で、「観点を持って保育を見直すことは自分のためになる」「自分の時間で様式を自由に使えるので気楽」と一人で振り返ることの特性を挙げていた。

D. 考察

保育者 A が個人の自己評価を行うために用いた「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版SICS)」の汎用性及び継続可能性について考察した結果、以下の知見が得られた。

1. 園内研修・個人研修としての留意点

今回、保育者Aは、自分の都合のよい時間に自分の保育を見直すことを可能にしてくれる自己評価を求めて、自主的に「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を試行してみた。その結果、改めて園内研修として「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」の意義が明示された。Form Bへの取り組みが難しかった理由として、保育者Aは分析と言えるほどの多くの視点が自分だけでは出せないことを吐露している。自分自身の書きだしたエピソードに対して他者からの視点が得られないことによって「一人だと甘くなっていないか」「独りよがりになっていないか」といった危惧を保育者 A は抱いたようであり、実践を映像記録におさめられなかったことに対しては「ビデオだけでも主任にお願いして取ってもらえばよかったかもしれない」と回顧していた。これらは園内研修として行った際には出てこなかった視点であり、「この自己評価全てを一人でこなしてすることは難しい」点を指摘したともいえる。また、自分自身で自分の保育を認めほめる作業が保育者Aには難しかったようである。保育者 A のみならず、どの保育者にとっても自分自身の良い点を自分自身から挙げることは憚られるであろう。園内研修を通して、他者から改善点だけでなく、現時点でよいと思われる点を挙げてもらうことは、保育者の自己肯定感を高め、明日の保育の取り組みへの励ましともなる。だが、この効果は保育者個人が行う自己評価ではなく、園内研修を通しての方が得られやすいことが示唆された。

同時に、個人研修という意味合いで個々の保育者が使用する際の利点が示唆されたことは興味深いと言える。一人で気兼ねなく自分の都合のよい時間帯に自由に使え、ある一定の観点を持って保育を振り返ることは個人レベルでも有意味であると保育者自身が捉えることができた点は新たな知見であった。

今後、自己内対話を充実させていく視点を検討し、盛り込んでいくことで、園内研修及び保育者個人が行う自己研修としての自己評価法の在り方を充実させていくことができるのではないかと思われる。

2. Form の特性

今回、保育者 A は、

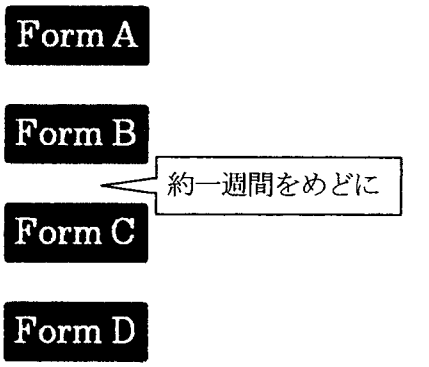

図1.「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」実施の手順

という従来の「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」が踏むステップを

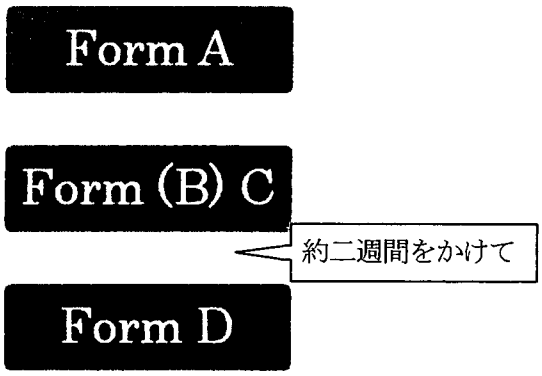

図2. 保育者 A が行った「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」実施の手順

という形で自分なりに変えて用いていたことになる。保育者 A にとって映像記録はとれなかったものの、Form A を用いての評定はスムーズなものであった。次の Form B での取り組みが難しいと判断した保育者 A は、Form A を Form C を使って分析検証しており、それに基づいて作成した Form D を約二週間かけて実行に移して保育実践に取り入れた経緯をたどっている。この間、Form の特徴と向かい合いながら困惑する姿から、Form C の使用法、個人記録だけではなくクラス全体の記録を収めて行くことの必要性、観察記録を基にした保育分析の重要性、そして必要な部分だけを切り取って Form を使用することへの疑問を提示している。

その後、保育者 A は再度このプロセスをたどっていないため、「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」の Form の特性が、個人向けの自己評価として汎用性を持つかどうか、私用の手順、Form の可変可能性とその影響を含めて検討していく必要がある。

3. 継続の重要性

再度、個人として試行してみるかと尋ねたところ、保育者 A は「Form C の視点で保育を具体的に見ることで、観点が散らばってよかった」「Form D に具体的に書き込んでみることで、明日早速できるところから手をつけ始めてみよう、と考える癖がつくのは心強いと思えるようになった」と答えてくれたが、「継続することは難しいかもしれない」という本音ものぞかせた。その理由として、

- いい点も悪い点も指摘されないので不安が募ってくる
- 他の保育者と分かち合わないので「なるほど」「どうして？」と自分の中での対話が進まず面白みに欠ける
- いつでもできると思うと怠慢な自分が顔をのぞかせる

ことを挙げている。他の保育者と刺激し合って学ぶことの重要性と自己内対話を定着させることが継続への鍵になることが示唆されたと言える。

E. 結論

他の保育者と語り合って自己の保育実践の質を高めて行くことを目的の一つとして掲げた、「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」は、園内研修で使用されることを想定して作成された自己評価法であると言える。今回、「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を用いた園内研修を通して、自己の保育を振り返ることの重要性を体感した保育者 A は、個として「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を用いることで実践の捉え直しをしようと試みた。その結果、個人向けの自己評価法としては、自己内対話を充実させていく視点を検討し、盛り込んでいくことで保育者個人が行う自己研修を支援していける可能性が示唆され、また、園内研修を通して他の保育者と刺激し合って学び、保育者個々が自己内対話を定着させることが自己評価継続への鍵になることが示唆された。

厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)
分担研究報告

「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を用いた保育者研修

分担研究者　箕輪潤子(川村学園女子大学)

本研究は、私立保育園A園で行われた「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を利用した園内研修から、保育の質の向上においてどのような役割を果たす可能性があるかを検討した。その結果、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を園内研修で利用することによって、新たな視点で保育を捉えることができ、それを次の保育につなげていくことができる可能性があることが示唆された。また、子どもの経験から振り返る保育プロセス」は実施方法を工夫することができるため、園の実態や特徴にあわせた園内研修をすることができることが示唆された。

A. 研究目的

本研究は、保育所における「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を利用した園内研修の実態から、保育の質の向上においてどのような役割を果たす可能性があるかを検討する。

B. 研究方法

2009年6月～11月にかけて、神奈川県内のA保育園で行われた「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を使用した園内研修の記録を取り、その記録を踏まえて考察を行う。

C. 研究結果

1.「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を利用して園内研修を行うまで

A保育園では「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を園内研修で利用する前に、理念や方法を保育者に理解してもらうための工夫を行っている。

それは、理念や方法についての説明を何段階かに分けて行っていることである。最初に、園長から主任に対し「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の紹介を行い、理念と「安心度」「夢中度」について理解してもらう。次に、主任からクラスのチーフに対して説明を行い、付属の DVD を視聴して評定と話し合いをしてもらい、取り組みについて理解してもらう。最後に、クラスのチーフから各クラスの保育者に対して説明を行い、実際の保育において「安心度」「夢中度」という視点をもってみる。

このようにいくつかの段階を踏み、説明されたりしたりを繰り返すことによって、保育者たちが「子どもの経験から振り返る保育プロセス」に興味を持ち、主体的に取り組んでいこうという姿勢が生まれたという。そして、全体での園内研修を行う前から、「安心度」「夢中度」という視点で保育を見る取り組みが繰り返されるようになっている。

2園内研修(1回目)

＜参加者＞

園長、主任3名、クラスチーフ

＜エピソード提供者＞

主任2名

＜研修における課題(園長・主任より)＞

園長から:A保育園で SICS を取り入れたら、どのようなかたちになるかを具体的に検討してみたい。安心度・夢中度をはかることが目的なのではなく、あくまでも保育の質の向上に向けての取り組みである。質の向上のためには評価と記録を欠かすことができないことから、具体的な評価の方法のひとつとして、取り組んでみたい。

主任から:子どもたちの表情や、周りの環境などを考えながら、安心度と夢中度を評定するところまでをやってみた。FormA をどんな風に書けばいいのかがわからず、戸惑った。そこで、具体例に倣って記入を行

ってみた(場面の時間帯、場面にかかわっている子どもの名前、遊びの状況、保育士の予想、子どもの性格、遊びがどのように展開していったか等)

＜研修の流れ(概要)＞

(1)エピソード(formAに記入)について、全員でDVDを視聴

(2)エピソード提供者が解説を行う。

(3)再度DVDを見直す。

(4)参加者全員でエピソードについて話し合う。

※4つのエピソードについて(1)〜(4)までのプロセスを繰り返す

＜研修の流れ(実際の例)＞

(1)DVDの視聴

(2)エピソードの紹介

子ども:Bくん

時間:夕方

場面:室内。机で、他の子二人と話している。机の上には画用紙、ペットボトルとクーピー。 ペットボトルに入れていたクーピーを取り出す。隣の塗り絵をしている子に話しかける。クーピーを数本手に持って、空気に絵を描くようにして手を動かす。何か歌を歌っている？表情は、さながら歌手のように熱唱している様子。

保育士が、塗り絵などができるように用意してある空間。戦隊ものの遊びをしているらしい。色は、いわゆる戦隊ものの 5 色。歌は主題歌。評定:＜安心度＞塗り絵はしていないが、彼の世界に入っている。リラックスしていて、満足そう。→5 ＜夢中度＞楽しそう→5

(主任からの補足・感想)こういう場面は、自分が保育に入っていると、通り過ぎてしまう。でも、こうしてじっくり見てみると、今までになかった発見があって、良い機会だった。日本版 SICS の意図している安心度、夢中度とは違うかも知れないが、A 園としてはこれでいいのではないか。A 園の特色というところで、さらにプラスすると、家から持ってきたおもちゃという安心材料になっていたのでは。家から持ってきた恐竜とウルトラマンのおもちゃが傍に置いてあったことで、安心度が高まっていたのではないか。A 園の取り組みの良さが見えてきた。Bくんの表情がすごく良い。

(3)DVDの再視聴

(4)話し合い

- 自分があの場にいたら(確かいたのだけれど)、気付かなかった！日頃から B くんは、家で戦隊もので遊んでいると思う。あそこだけを取り出してみると、こうして映像で見てみると、ひとつひとつに意味があるんだなと気付く。きっと箱は基地、ペットボトルは戦隊の乗り物。視点が変わる。
- B くんは、去年から歌を歌ったり、歌いながらジャンプして飛び降りたりとかしていた。DVDを見たとき、エピソードの解説を聞くまでは「夢中度は 5？」と思ったが、あらためてそういう視点で見ると、第一印象が変わり、見方が変わる。
- 朝、不安そうな顔をして来て、安心するまで時間のかかるお子さんという意識があった。こういう場面をじっくり見てみると、安心しているんだなとわかる。
- 集団の雰囲気が良かった。一見ごちゃごちゃしていて、もしかしたら、保育士が「ほら、片付けるよ」と入ってしまう場合もあるかも知れないが、A 園では、そういうことをしない風土があるから、こういう場面が保障されたんだなと思った。
- 安心度・夢中度を何のために評定したのかということを考えた。この場面は、声をかけてしまいがちな場面だが、こうして見ることで、安心してるんだ、夢中なんだっていうことが分かるので、今取り組んでいるのは意味があるのかなぁ(肯定的なニュアンスで)と思った。
- 私たちは、クーピーで塗り絵をする場所は「塗り絵をする場所」、おままごとをする場所は「おままごとの場所」という意識があった。しかし、年齢にもよるが、組み合わせて使うことも見立て遊びが豊かになることにつながりうる。私たちがどういう風にかかわるか、どんな言葉がけをできるかを、考え直させてくれる場面だった。

この後2つのエピソードについても話し合いが行われた。

＜研修の感想＞